



John Gordon,

*Sensation and Sublimation in Charles Dickens*

(226 頁, New York: Palgrave Macmillan, 2011 年 5 月)

ISBN : 9780230110885

(評) 渡部智也

Tomoya WATANABE

昨年、イギリスの大学院に留学していた時のことである。最初のオリエンテーションと呼ぶべき授業の後、我々学生は建物1階にあるカフェテリアでお茶を飲みながら親睦を深めた。宴もたけなわ、といったまさにその時、私は一人の妙な男性に話しかけられた。妙な、というのは、その出で立ちと中身の織りなすコントラストゆえである。その人物、外見はまさに若返ったピクウィック氏と瓜二つで愉快そのものなのだが、話してみるとその関心事はセンセーション小説や人体解剖など、陰鬱としたものばかり。例えるならば、外見はピクウィック、中身はユライヤ・ヒープといった塩梅で（あくまでイメージではあるが）、全体に、まるでディケンズ作品から飛び出てきたかのような印象を受けたのだ。一体誰だろうと思ったこの人物こそ、その数カ月後に授業で度々お世話になることとなった、同大学教員のアンドリュー・マンガム氏（Andrew Mangham）であったのだが、その段階での私はそのことを知るよしもない。ただ、変わった研究をする人がいるんだなあ、と思っただけであった。ところがその後、他の学生の話や、他大学の研究者を招いての特別講演などを聴いていると、この「センセーショナル」というキーワードに関心を寄せる研究者が少なくないことを実感した。近年、新刊書籍や論文を見ていると、とかくセンセーションと名のつくものが多く、この分野が強い関心を集めているということを漠然と感じていたのであるが、その知識が経験によって裏付けされた格好となった。この経験があまりに強く頭に残っていたためであろうか、今年5月に出版された「センセーション」と名のつく批評書、ジョン・ゴードン（John Gordon）著、*Sensation and Sublimation in Charles Dickens* を最初に目にしたとき、これもまた、その潮流に乗った一つの批評書なのだろう、と思った。そしてページをめくり、私は自らの浅学を恥じ入ることとなった。

OEDによれば、‘sensation’という言葉は、（1）感覚の働き（an operation of any of the senses）、（2）心情、感情（a mental feeling, an emotion）、（3）興奮、強烈な感情（an excited or violent feeling）という3つの定義に分けられており、

センセーショナル小説などという場合のセンセーションは、当然3つ目の意味に当たる。しかし、本書のイントロダクションで著者が説明しているように、本書で言うところのセンセーションとは、あくまで「視覚や聴覚などの感覚にまつわるもの」を指し、*OED* の定義で言えば、1番目の意味で使われているのだ。センセーションというタイトルからすぐにセンセーショナル小説等を思い浮かべてしまった自身の短絡的性分を呪うとともに、さらなる精進の必要性を痛感した次第である。

さて、その著者ジョン・ゴードンである。著者略歴を見れば明らかなことではあるが、彼は20世紀英文学、とりわけジェームズ・ジョイスを中心に研究を行っている研究者で、その著書もジョイスに関するものがほとんど。私の調べた限りでは、本書がディケンズについて書いた彼の最初の書籍ということになる。言うなれば、ジョイシアン(ジョイスの研究者)の眼から見たディケンズ、という趣のある批評書である。

まず簡単に、本書の中身を概観したい。本書は大きく分けて4つの章からなり、その中で3つの作品を扱っている。まず、'What Right Have They to Butcher Me?' と題する第1章では『オリヴァー・ツイスト』を論じている。表題は死刑宣告を受けたフェイギンの有名なセリフであるが、ジョン・サザランド (John Sutherland) が既に指摘しているように、当時の法律に照らし合わせて考えた場合、自ら殺人を犯したわけでもないフェイギンがなぜ絞首刑になるのか、というのは大いに疑問のある問題である。ゴードンはこの疑問を起点として論考を開始し、この作品が、イエス・キリストを体現する人物であるオリヴァーと、過ぎ越しの祭で食べるパン (マツォー) に使うためにキリスト教徒の子供を殺し、その血を奪わねばならないユダヤ人を体現する存在であるフェイギンとの対立の物語である、と考察し、この物語の根底に、キリスト教社会に根強い「血の中傷」 (blood libel) が存在することを明らかにする。

続く第2章、'“Thankee, Mum,” Said Toodle, “Since You *Are* Suppressing”' では、『ドンビー父子』を扱う。著者は、『ドンビー父子』は『オリヴァー・ツイスト』等のそれまでの作品とは異なり、社会的イデオロギーとはあまり関わりのない作品ではあるが、一方でディケンズの言葉の扱いが著しく進化した作品であり、特に第30章において、ドンビーがマホガニーのテーブルを見やり、そこに自分の考えを投影させる場面ほどすばらしい場面は、20世紀以前の小説には他に類を見ない、と絶賛する。そして、この物語においては重要なモノはすべて隠され、周辺に、下部に追いやられており、それを放出させる媒介としての言葉の力こそが重要だと言うこと、従って、言葉の表面に現れた意味ではなく、表面に現れない隠された含意こそが重要であることを例証する。

第3章は‘In a Thick Crowd of Sounds, But Still Intelligibly Enough to Be Understood’と題し（といってもこれらタイトルは全て作品からの引用だが）、『荒涼館』を扱っている。著者は、この作品は3つの神話的な組み合わせ、すなわち、ダイダロスとイカロス、ペルセウスとメデューサ、オルフェウスとエウリュディケの物語が下敷きになっており、最も触れたいものは触れてはならないものである、という「毒されたキス」(poisoned kiss)のモチーフがその基盤となっていると考察する。そして、『荒涼館』は言葉の扱いが『ドンビー父子』から更に熟練した作品であり、外的なものと同じくらい、内的、心的メカニズムが問題となっている、心理学的迷宮のような作品だと述べる。

第4章は少し趣向を変えて（もっとも、前章の続きであることには変わりないのだが）、『荒涼館』に関する10の疑問を考察する、という内容になっている。この疑問も、例えば章のタイトルにもあたる「エスタは綺麗なのか？」(Is Esther Pretty?)を筆頭として、多くの読者が共有するであろう作品にまつわる謎ばかりであり、非常に興味深い。後ほど述べるが、本書の中でもっとも面白い章と言えるかもしれない。こうして10個の疑問に著者なりの解答を与えた上で、この作品にはディケンズの時代の「夢の論理」(dream logic)が働いている、と論じて締めくくる。このように、本書ではこれら3つの作品それぞれの根底に流れる力を示し、それにディケンズが応える様を例証している。

本書の特色を一言で言うならば、「言葉に対する意識の高さ」になるだろう。「20世紀最大の言葉の魔術師」とも称されるジョイスを研究するためには、「言葉」に対するとりわけ強い意識が求められるのは間違い無い（無論、これはディケンズを研究する上でも極めて重要な要素である）。その観点から見ると、さすがに著者ゴードンはジョイス研究で名をはせた人物だけあって、言葉に対する意識が非常に高い。そして、その言葉に対する洞察の深さを巧みに用いて、物語の表面に現れていないものを暴き出す、というのが本書の特徴となっている。具体例を見てみよう。第1章においてゴードンは、フェイギンと絞首刑の切っても切れない関係を強調する。その際に、彼の周りに絞首刑のイメージが満ちているとし、普通に読んでいては見落としがちな‘knot’, ‘hanging’, ‘throats and necks’などの言葉の使用、例えばフェイギンの‘knotted club’や、ナンシーの指から鍵が‘hanging’している様、あるいは‘Toby Crackit has been hanging about the place’といった表現に言及している。また第2章において、カーカーとイーデイスの駆け落ちに言及する際には、イーデイスが‘her arch of diamonds’と描写されるティアラを投げ捨てる場面と、その少し後でカーカーが‘arch’をくぐってイーデイスの元に行く描写に着目する。その上で、ラテン語における‘arch’を表す言葉‘fornix’が「姦通する」(fornicate)の語源となっ

ている事を示し、ここで二人の関係が暗示させられているという。いずれも、言葉への強い意識を感じさせる考察である。

著者の言葉にこだわった細かい読みが最も生かされているのが、第4章で『荒涼館』にまつわる10の疑問に解答する部分である。例えばその中に、「オルトンスはいかにデドロック夫人の真実を掴んだのか?」という疑問がある。状況を概観した後、彼はオルトンスがエスタに自分を雇って欲しいと懇願し、彼女の手を取ってキスをする場面において、*'takes note, with her momentary touch, of every vein in it'* と、*'take note'* という少々場違いな表現が使われていることに着目する。そして、ジョーがオルトンスとデドロック夫人の手の違いについて証言する場面（つまり、手で人の区別が出来る、というエピソード）に言及した上で、夫人の *'keeper of the gloves'* であるオルトンスがもっとも手と手の類似に気づきやすい立場にいる人間であると述べ、オルトンスがここでエスタと夫人の手の類似に気づいたのでは、と推理している。やや飛躍が見られるとはいえ、言葉の使い方に重きを置くからこそなせる、面白い考察と言えるだろう。

このように、言葉への意識の高さに裏打ちされた興味深い論を展開する本書であるが、それが時に空回りするケースも少なくない。例えば著者は、『オリヴァー・ツイスト』を論じる過程で *'composing'* という単語に注目し、*'Characters in this novel are sometimes described as 'composing' their scattered thoughts before sleeping'* と述べている (29)。確かにオンラインコンコーダンスをチェックすると、*"composing"* という表現は作品で4度用いられているが、しかしそのうち筆者の述べる条件に当てはまるのはたったの2例のみで、*'sometimes'* とまで述べて論を構築するのはいささか苦しいと言わざるを得ない。また『ドンビー父子』においては、「胸」(*breast*) という単語に着目し、同時代の他の作家達が何のてらいもなく *'her breasts'* という表現を使う一方で、自分の知る限り、ディケンズは自身の作品中で女性登場人物に *'breasts'* と複数形で表現することはなく、*'it is always "her breast," as if in overdecorous denial of the most obvious thing about them, that they come in twos'* と述べる (106)。なるほど、『ドンビー父子』においてはその通りである。しかし、上記と同様にオンラインコンコーダンスを利用すれば明らかなことであるが、ディケンズは『骨董屋』でネルの *'breasts'* に言及しており、この問題を考えるのであれば、この事例に関する言及があってしかるべきだろう。このように、その論の根拠にいささか不正確さが見られるのは非常に残念である。文学テキストは一語一句読むべき物で、コンコーダンスなどを用いて収集したデータには意味がない、という考え方もあるかもしれない。しかし著者は序文の中で、本書を書くにあたり、何よりもまず Google books やメーリングリストに助けられた、と謝辞を述べ、デジタルな

研究手段を駆使してこの論を構築したと述べている。それならば、機械を利用してこのあたりの裏付け調査（5秒で終わる作業である）を行なってしかるべきだったのではないかと思う。

他にもいくつか、不正確な記述が見られる。42ページで、フェイギンは、作品前半に描かれるキリスト教徒の子どもを殺す大人達、すなわちマン夫人やビードル（無論バンプルのこと）、救貧院委員会などと結びつく、と述べている。それはよいとして、その結びつく面々の中に Gammidge なる存在しない人物の名前が挙がっているのは理解に苦しむ。これはおそらく Gamfield の間違いであろう（仮に『デイヴィッド・コパーフィールド』のミセスガミッジと混同したとしても、彼女は Gummidge であり、綴りも異なる）。また80ページで、カーカーの死の直前、彼が不眠に陥り、その旅路が「幻想のよう」(like a vision) であることに着目した際には、この場面でディケンズは「20世紀になされる急速眼球運動 (Rapid eye movement, レム睡眠の「レム」にあたる) の研究、すなわち、眠っているときに夢を見ることが出来ない、代わりに目覚めているときに幻覚を見る、という研究を先取りしているようだ」と述べているが、この読みには不確かなところが多すぎる。この「研究」というのは、レム睡眠の発見そのものを指すのか（だとすると、少し誤りがあるように思う）、断眠実験のことなのか、はたまたナルコレプシー等の睡眠障害の研究を指すのだろうか？ディケンズと眠りの関係に強い関心を持つ評者はとても気になるのであるが、残念ながらこの点については註も何もない。この例にも見られるように、註や、あるいは例示によってさらなる解説が必要と思われる場面で、それらが全くなされないというケースが目立つのは、読者にまったく優しくないと感じさせられた。

本書は、一つ一つの言葉に対する着目に根ざした、非常に興味深い論考である。だからこそ、もう少しその根拠を裏打ちして読者に納得させるような作業を行っておくべきではないかと強く思う。「感覚的に」言葉をとらえ、非常に鋭い読みを発揮する一方で、時として一人で「舞い上がり」、あらぬ方向に向かって飛び立っている、というのが、表題に即した率直な感想である。